

ユニット・プログラム開発の手順

青年Iタイプ「日本語の自学自習」プログラムを例に

山田 雅世

目次

- 1. ユニット・プログラム開発とは
 - 1 - 1 ユニット・プログラム開発とは
 - 1 - 2 プログラム開発プロジェクト
 - 1 - 3 現場におけるプログラム開発
 - 2. プログラム開発の手順
 - 2 - 1 プログラム開発の手順
 - 2 - 2 プログラムの具体的説明
 - 3. プログラム実施の留意点
 - 4. 今後の課題
- 資料 青年Iタイプ目標構造表

1. ユニット・プログラム開発とは

1 - 1 ユニット・プログラム開発とは

プログラムとは「明確な目的意識をもって計画・構成されたひとまとまりの活動群」をすべて指し、センターの4か月のプログラムや一週間のまとまりの時間割もプログラムといえることができる。本稿でいうユニット・プログラムとは達成目標（後述）を単位としたプログラムである。このユニット・プログラムの目標は目標構造表に基づいて開発する。

目標構造表の内容及び構造について簡単に説明する。目標構造表は中国帰国者定着促進センター（以下所沢センター）の指導理念を分析・整理したものである。所沢センターの大目標は「日本での生活に対する自信と意欲、それを裏付ける基礎技能・基礎知識を身に付ける」として定義されている。目標構造化とは、この大目標をさらに中目標に分析し、それぞれの中目標をさらにいくつかの小目標群に、小目標をまたいくつかの達成目標へと分析していくことである。目標構造化の最終段階である達成目標においては理念的目

標を行動目標に操作的に定義し、誰が見ても理解のずれがないことを目指して作られた。達成目標は4か月の学習の具体的な到達点を示したものである。(目標構造表作成については紀要2号「カリキュラムおよび理念的目標の構造化について」佐藤・小林1994参照のこと)

ユニット・プログラムの開発とは目標構造表によって定義された達成目標に到達するための「最適ルート」を開発することである。最適ルートの開発とは達成目標を解釈・分析し学習項目まで出す構造化と、構造化した目標群を実際にどのように動かしていくのかという実施のための諸要件を設定することである。

1 - 2 プログラム開発プロジェクト

プロジェクトは目標構造表が完成した段階で開始された。プロジェクトの目的は、ユニット・プログラムの開発の理想的な手順を試作することであった。手順はプログラムを実際に開発しながら作成したが、プログラムの中身自体の作成は主目的ではなかった。

プログラム開発プロジェクトは、2名の開発担当者が各々異なった小目標または達成目標を選択し、一週間に一度(計約15回)目標構造表を作成したメンバーとの話し合いを持つ形で行われた。そこでは開発担当者が作業の進行状況を報告し、作業中に出てきた問題点を話し合った。

1 - 3 現場におけるプログラム開発

所沢センターにおいてプログラム開発者はクラス担任であり担当クラスの16週間のプログラム(時間割)の作成を行い、授業も実際に行う。プログラム開発者が担任を兼ねることの長所はプログラム開発をおこないつつ成果を即座に毎週作成する時間割に生かしたり開発中のプログラムを担当しているクラスで試したりすることが容易にできるということである。

教育の現場はいつも学習者をかかえており、プログラムの開発だけに時間と労力を費やすことはできない。このような状況の中でのプログラム開発に

においてはプログラムの完成を待ってから使用するというのではなく、プログラムの大枠を初めに作り、具体物は開発・使用・修正の繰り返しによって完成させていくのが現実的な方法である。

2. プログラム開発の手順

2 - 1 プログラム開発の手順

第二回目のプログラム開発プロジェクトで試作した開発の手順を紹介する。この開発手順は青年Iタイプ（日本語が未習で学習適性がやや低い）の目標構造表の以下の目標を達成するためのプログラムを実際に開発し、開発過程を記録しそれに修正を加えたものである。またプログラムを実際にクラスで使用し、その結果をプログラムにフィードバックした。

中目標2 「将来の生活に有用な基礎知識・基礎技能を身に付ける」

小目標5) 日本語自学「日本語の自学自習能力を身に付ける」

達成目標 生活の中で日本語を学ぶ方法を知る

日本語学習に必要な基本的技能を身に付ける

自分で学習課題を設定する力を身に付ける

「日本語の自学自習能力を身に付ける」という小目標にむけて既にさまざまな試みが行われており、活動例の蓄積も多い。しかし、目標の性質が姿勢・態度的な面を含んでいるため、目標分析や評価の規準作りが難しくプログラムとして整理されていない目標であった。（青年Iタイプ目標構造表は資料1参照）

プログラム開発は以下の手順を取ることにした。

プログラム開発は（1）状況分析、（2）目標達成のプロセスの構造化、（3）実施のための要件設定の3つに分けられる。この三つの関係を示したものが図1である。

(1) の状況分析においては2つの作業をおこなう。プログラムのターゲットとする学習者を知ることと現在あるプログラムを評価することである。

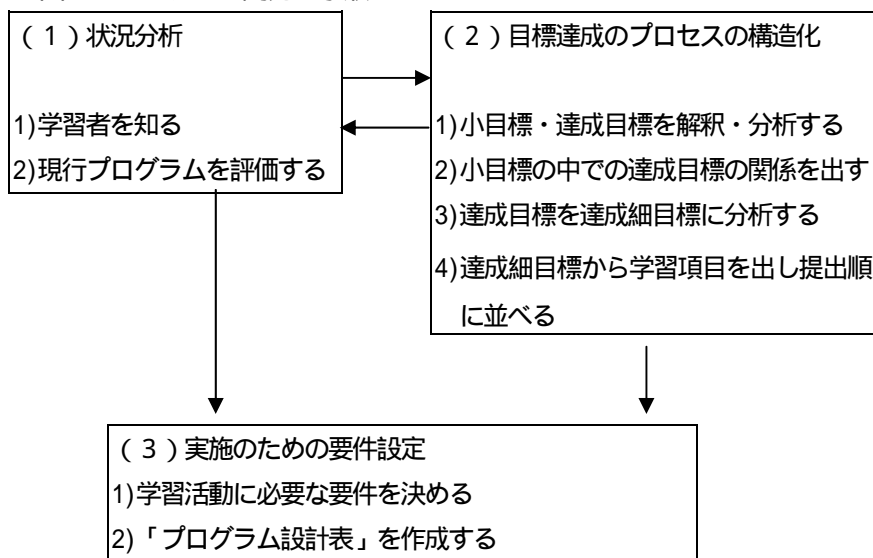
(2) の目標達成のプロセスの構造化においては目標構造表の達成目標を解釈し達成目標をさらに分析し達成細目標、学習項目を出し提出順に並べる。

(1) と (2) は同時進行でおこなう。

(3) の実施のための要件設定では (2) を実際に動かしていくための諸要件を設定する。

以上の3段階を青年Iタイプの「日本語自学自習プログラム」開発を例に説明する。

図1 プログラム開発の手順



2 - 2 プログラム開発手順の具体的説明

(1) 状況分析

1) 学習者を知る

プログラムを開発する際にはまず開発するプログラムのターゲットとなる学習者のイメージを特定する。イメージ作りのための材料は多ければ多いほど良い。既にセンターを修了した学習者と現在研修中の学習者のデータを集め、チェックする方法と、開発するプログラムにおいての学習者のパフォーマンスを達成目標を規準に観察評価する二つの方法をとる。

データでは以下の項目を調べる。

- ・年齢
- ・職歴
- ・学歴
- ・日本語学習歴（既習であれば学習期間・形態・使用教科書等も）
- ・外国語学習歴
- ・学習適性
- ・センター退所後の進路希望

以上の項目にしたがって青年Iタイプの学習者タイプを簡単に記述する。

年齢は17歳以上で20歳前後が多い。学歴は小学校低学年中退から中学校卒業の幅があり概して学校を離れてから時間がかなり経っている。したがって学校という場で学習を行うことに対して不慣れである。小学校中退の学習者に関しては、母国語である中国語の読み書きの能力や基本的な計算力に問題がある場合が多い。日本語学習歴はほとんどの場合ない。職歴は農業、家事手伝い等であるが就職経験はあっても短期である。センター修了後の希望は、日本語を学習し、職業訓練校で技術を身につけ就職する、または日本語学習修了後直接就職する場合が多い。

Iタイプの学習者のパフォーマンスを達成目標 「生活の中で日本語を学ぶ方法を知る」「日本語学習に必要な基本的技能を身に付ける」「自分で学習課題を設定する力を身に付ける」を規準に評価した結果は以下のとおりである。

達成目標 生活の中で人との係わりの中から学ぶことを行ってはいるが無意識的である。

達成目標 学習の基本的技能は身に付いていない者が多い。具体的には以下のとおりである。学習技能のなかでもかなり基本的なことができないために日本語学習以前のレベルでつまずいてしまうことが多い。

- ・テープレコーダー等学習に必要な機器の操作ができない
- ・板書をノートに写すのが遅く、不正確
- ・テープ教材やテキスト教材を使つての練習に不慣れ
- ・効率良く練習したり覚えたりする工夫をすることに不慣れ

達成目標 学習課題を自分で設定したことがない。学習課題の設定はすべては教授者が行うもので学習者はそれに従っていくものであるというピリーフを持っている

2) 現行プログラムを評価する

現行プログラムは達成目標からプログラムを作成したものではないので評価をおこなうとさまざまなレベルの問題点が出てくる。現行プログラムの評価の目的は目標達成のプロセスの構造化を経ないで作られたプログラムを、目標に沿ったものに改良する際の問題点を把握することである。プログラムの評価は開発する目標に関連のある授業を時間割または授業記録(教案)によって行う。

評価の観点は以下のとおりである。

- ・指導目標と授業の内容の整合性
- ・学習項目の内容と提出順
- ・4か月の中での指導時期
- ・指導に使った時間

評価はあくまでも開発するプログラムについてのみ行い他のプログラムとの関係やバランスなどはここでは考えない。

(2) 目標達成のプロセスの構造化

ここでは達成目標を解釈するために大目標、中目標、小目標の理解を再度行い、達成細目標とその下位項目である学習項目までを導き、提出の順番に配列する。

1) 小目標・達成目標を解釈・分析する

目標構造表の小目標および達成目標の記述を解釈する。解釈のための視点は以下のとおりである。

- ・センターの教育理念
- ・学習者タイプ
- ・物理的条件
- ・経済的条件
- ・人的条件

以上の視点から青年Iタイプ「日本語の自学自習」の達成目標を解釈した。

達成目標	生活の中で日本語を学ぶ方法を知る
------	------------------

言語習得を目的にした学校以外の場でも人との係わりを通じて日本語を学ぶことができることを意識化し、学ぶための具体的方法を知る。

達成目標	日本語学習に必要な基本的技能を身に付ける
------	----------------------

基本的技能である以下の三つの技術を身に付ける

- ・練習の技術
- ・記憶の技術
- ・調べる技術

基本的技能といってもここで扱うものはいわゆる学習ストラテジー以前の

レベルである。

達成目標	自分で学習課題を設定する力を身に付ける
------	---------------------

自分で課題の内容を選択し、学習のペースを設定する力を身に付ける。

2) 小目標の中での達成目標の関係を出す

達成目標 において、生活の中でも学習することができることを知り、学習しようという姿勢を身につけ、達成目標 では学習を有効に進めていくための基本的な学習技術を身につける。達成目標 では自分のペースに合わせて課題の設定を行うことを通して、学習を計画的に行ってみようという態度を身につける。

3) 達成目標を達成細目標に分析する

4) 達成細目標から学習項目を出し、提出順に並べる

達成目標の解釈に基づきさらに細かい目標に分析する。この下位目標を達成細目標と呼ぶ。次に達成細目標ごとに学習項目を出しそれらを提出する順番に並べる。

達成目標 「生活の中で日本語を学ぶ方法を知る」を例に「目標達成のプロセスの構造化」の過程を具体的に説明する。

達成目標 の「生活の中で日本語を学ぶ方法を知る」を解釈する。まず第一番目に目標のキーワードを取り出し定義する。この達成目標のキーワードは「生活の中」である。

「生活の中」とは退所直後Iタイプの学習者が遭遇するすべての場面であるが退所後の学習者が遭遇する場とはどのような場が考えられるだろうか。Iタイプの学習者が辿る一般的な進路ルートはまず8か月の日本語研修を受

け、その後就職する、または職業訓練校へ進むコースである。したがって彼らの生活の場となるのは、日本語学校、職業訓練校、職場または彼らを取り巻く近隣社会である。これらのうち語学学習の為に作られた日本語学校以外の場を「生活の中」とする。

「生活の中」には学習のための様々なリソースがある。学習リソースには人的リソースと非人的リソースがある。

人的リソースとは 職場の同僚・上司・その他仕事関係の付き合い、学校のクラスメイト・先生、近所の人、ボランティア、自立指導員、帰国者の知り合い等が考えられる

非人的リソースとはテレビ、新聞、雑誌、情報誌等のメディア等がある。当プログラムでは生活の中での人的リソースの活用に限定し、非人的リソースの活用については他のプログラムで扱うことにする。

達成目標 の解釈

「言語習得を目的にした学校以外の場でも人との係わりを通じて日本語を学ぶことができることを意識化し、具体的な方法を知り、その方法を使って日本語を学ぶことができる」

達成目標の解釈から達成細目標を立てる

- a . 生活の中で日本語を学ぶ方法を知る
- b . 観察することによって日本語を学ぶことができることを知る
- c . 人とのやりとりの中で日本語を学ぶことができることを知る
- d . 人に尋ねることによって日本語を学ぶことができることを知る

達成細目標 b「観察によって日本語を学ぶことができる」を例にとった場合、学習項目は以下のとおりである。

- ・知らない日本語で指示された時、状況や相手の表情や身振りを手掛に指示を理解する
- ・相手が発話する日本語を繰り返し聞きことによって語彙を増やすことができる

他の達成細目標及び学習項目は資料2「プログラム設計表」参照のこと

(3) 実施のための要件の設定

1) 学習活動に必要な要件を決める

目標達成のプロセスの構造化において分析された目標群を実際の学習活動として動かしていくための諸要件は以下のとおりである。

- ・実施時期
- ・時間(コマ数)
- ・活動タイプ
- ・教授者の使用言語
- ・教材・教具
- ・プログラム使用上の留意点

設定事項のうちの実施時期と使用時間は本来他のプログラムとの関係やカリキュラム全体から設定すべきことである。その作業は現在進行中なので現時点では開発するプログラムのみを考えて設定する。

2) プログラム設計表を作成する

プログラム設計表は開発したプログラムの内容全体が一目でわかるように簡潔にまとめたものである。達成目標・達成細目標・学習項目の構造と目標ごとに実施の要件を対応させた。

表1は青年Iタイプ目標構造表小目標2 - 5) 日本語の自学自習、達成目標 の設計表である。

表1

プログラム設計表 I - 2051 [生活の中で日本語を学ぶ方法を知る]

時期	達成細目標	コマ数	学習項目	活動	備註	教材	備考
初期	生活の中で日本語を学ぶ方法を知る	1.0	日本語を学ぶのにどのような方法が可能か考える	話し合い	中	なし	
	観察することによって日本語を学ぶことができることを知る	1.0	知らない日本語で指示された時、状況・相手の表情や身振りなどを手がかりに、指示を理解相手が発話する日本語を繰り返し聞くことによって、語彙を増やす	実習	中日	なし	
	人に尋ねることによって日本語ができることを知る	1.0	物の名前を知りたいときの聞き方 聞いた答えをメモに取る メモが取れないときの対処法	実習	中日	なし	
1.0		漢字の読み方を知りたいときの聞き方	実習	日	なし		

「目標コード」	I - 2051 数字は目標コード番号
実施時期	センター16週間の期間のうち1～6週を前期、7～11週を中期、12～16週を後期とする
コマ数	1時間の授業は50分なので1コマは50分、0.5 コマは25分
学習項目	基本的には提出順に項目を並べるが順番を考えなくても良い場合はそのことを明記する
活動タイプ	授業活動の形態 「話し合い」とは学習者と教授者が話し合うことを通して物事について知ったり理解を深めたりする形式で一方的な解説や講義形式の活動と区別している 「実習」とは教室での運用練習などの模擬練習だけではなく実際の場面で使うこと
使用言語	教授者が学習活動において使用する言語 「中」は中国語を使うもの 「中日」は中国語と日本語の両方を使うもの 「日」は日本語のみを使うもの。センターの人的条件から、動機付けを、予め準備した中国語の説明文を読ませ等の工夫をするものもここに含める
教材	教材があるものに関してはタイトルを入れ、無いものはなしと書く
備考	以下の場合には備考欄に記入する ・他の達成目標の学習項目と一緒に指導を行った方が効果的な場合 ・教材化はしていないが使用可能な材料がある場合はここに入れる ・その達成目標の指導を教室での授業以外（センターの日常生活）でも意識的に指導する場合

3. プログラム実施の留意点

プログラムを実際に使用する際の留意点を以下にあげる。

1) 学習者に合わせてプログラムの学習項目を選択する

プログラムを開発する際、学習者タイプに合わせて学習項目を立てているが、実際にそれを使う学習者の力を考慮して項目を選択する。

2) 「実施のための要件」の内容は変更しても良い

1)と同様に学習者のタイプにあわせて変える。達成目標が効率良く達成されれば実施の要件の内容は変更しても良い。たとえば活動タイプで実習となっているものでも、教室での講義形式で済むものはそのようにする等。

3) 使った結果をモデルプログラムにフィードバックする

プログラムはあくまでも1つのモデルである。モデルを叩き台にして学習者に合わせたバージョンを作ったり、実際に使用しその結果によって修正を加えていくことが重要である。

4. 今後の課題

1) プログラム開発による達成目標の検証

プログラム開発によって達成目標はより具体的かつ明確になるので達成目標の設定している内容とレベルが学習者の能力に合っているか、目標として相応しいかを検証することが必要である。目標の設定しているレベルの検証とは目標達成を「～について知る」だけで達成できたとするのか「～について知り、～ができる」まで広げるのか、またその必要があるのかを決めることである。

2) カリキュラム全体の中におけるユニット・プログラムの配置とバランスの検討

今回のプロジェクトにおいては達成目標単位のユニット・プログラムについてのみ考え、カリキュラム全体の中における位置や時間のバランス等はいっさい考慮しなかった。今後、全体カリキュラムの中での各ユニット・プログラムの実施時期、時間のバランスなどを規定しそれに基づいてプログラムを開発する必要がある。

3) 複合プログラムの開発

ユニット・プログラムを実際に実施する際、効率を考えると単独での実施よりいくつかのユニット・プログラムを組み合わせた複合プログラムとしたほうが都合の良いものがある。また、達成目標の性質によって単独では実施し難いものがある。実施の効率と学習効果を考えて達成目標の組み合わせを考えていくことも今後の課題である。

【参考文献】

- B. S ブルーム他 (1973) 『教育評価法ハンドブック』第一法規出版
- Nunan, David (1988) Syllabus Design. Oxford University Press
- R. M ガニエ・L. J ブリッグス (1986) 『カリキュラムと授業の構成』
- Wenden, Anita・Rubin, Joan (1987) Learner Strategies in Language Learning. Prentice Hall
- 稲垣滋子 (1990) 「帰国生と日本語教育」異文化間教育4 アカデミア出版
- 小林悦夫 (1993) 「第二言語としての日本語教育の課題」中国帰国孤児定着促進センター 紀要第1号
- 小林悦夫 (1994) 「中国帰国者に対する日本語日本事情教育のカリキュラム開発と今後の課題」曾・江畑 (編) 『移住と適応』有斐閣 (予定)
- 佐藤恵美子・小林悦夫 (1994) 「カリキュラム開発および理念的目標の構造化について」中国帰国者センター紀要第2号
- 田中望・斎藤里美 (1993) 『日本語教育の理論と実際』大修館書店

資料：青年 I タイプ目標構造表 (ver.2.2)

中目標1：身近な生活行動場面の基礎知識・基礎技能を身に付ける

小目標	達成目標
1) 交通 交通機関を利用して目的地に行くことができる	徒歩や自転車での通行に関する <u>交通ルール</u> や <u>注意事項</u> を守って通行できる
	よく知られている場所を指定されれば、 <u>通行人</u> に道を尋ねて目的地に行ける
	前もって行き方を尋ねて、目的の駅まで電 車を利用して行ける
	前もって行き方を尋ねて、目的の停留所ま でバスを利用して行ける
	道に迷ったときや事故に遭遇したときの対 応ができる
2) 消費生活 消費生活についての知識を身に付け、日常必要な物が買え、サービスが利用できる	<u>商店の形態の違い</u> や <u>価格の仕組み</u> の概略を知る
	<u>買いたい物のある場所</u> を探して、 <u>選んで買える</u>
	<u>身近なサービス</u> が利用できる
	<u>釣り銭の間違ひ</u> に対処でき、 <u>品物の返品交換</u> ができる
	<u>契約上のトラブル</u> を回避するための知識を身に付ける
	<u>金融機関の種類</u> や <u>利用法</u> を知る
3) センター センターでの学習生活に必要な知識を身に付け、必要な行動ができる	欠席、早退、遅刻の届けができる
	<u>当番(日直等)</u> の仕事が果たせる
	<u>その他、センターの規則</u> を守って行動できる
4) 住居・近隣対応 居住環境についての知識を身に付け、両親を助けて近隣の人や援助してくれる人と良好な関係を保つことができる	<u>日本の住宅事情</u> と <u>住宅の種類</u> や <u>入居方法</u> を知る
	日本の <u>近所付き合い</u> について知り、 <u>近隣の人</u> とよい関係を保てる
	<u>身元引受人</u> や <u>自立指導員の役割</u> を知り、これらの人々とよい関係が保てる
	<u>和室や食卓</u> での基本的なマナーを身に付ける
5) 職場・自分学校 求職の方法や職場の習慣についての知識を身に付け、簡単な面接試験に対応できる	<u>求職</u> について知る
	<u>職場の習慣</u> について知る
	簡単な面接試験に対応できる
6) 健康 日本の医療事情について	日本の <u>医療制度</u> について知る
	<u>病気を予防し、健康を維持するための知識</u> を身に付ける

の知識を身に付け医療機関が利用できる	る 1、2度自立指導員等の付き添いがあれば 次からは医療機関が利用でき、家族の付き添いもできる
7) 通信 郵便や電話についての知識を身に付け、利用できる	電話利用に必要な知識を身に付ける 電話の利用ができる 国内及び中国への手紙や小包の出し方について知る 国内及び中国に手紙や小包が出せる
8) 社会福祉・手続き 帰国者が受けられる公的援助と必要な手続きについて知る	帰国者受け入れに関する公的援護策について知る 自分に必要な諸手続きの種類とその方法を知る
9) 子弟教育 日本の教育事情を知り、父母を助けて保護者の役割が果たせる	日本の学校制度や教育事情を知る 帰国者二世の進学事情を知り、必要に応じて兄弟の進路決定に助言できる 小中学生の生活について知り、学校との連絡や必要な物の準備ができる 兄弟が学校適応上直面する問題について知り、助言その他の援助ができる

中目標2：将来の生活に有用な基礎知識・基礎技能を身に付ける

小 目 標	達 成 目 標
1) 一般教養 帰国者二世に必要な一般教養を身に付ける	日本と中国の政治体制の違いについて知る 日本と中国の簡単な歴史を知る 日本と中国の簡単な地理及び世界の簡単な地理を知る 日本人の生活様式や価値観について知る 中国帰国者問題について知る
2) 進路知識 帰国者二世の進路決定に必要な知識を身に付ける	今からでも可能な学歴や資格の取得法について知る 進路を決める際に必要な情報の入手先について知る 中国語力の活用の途について知る
3) 異文化 異文化社会での適応に伴う問題、及び日本での人間関係において生ずる問題を知り、自分の問題として対処法を考えてみる	一般的な異文化適応過程について知る トラブル事例等を通じて、文化の異同を把握し、その背景について考えてみる サポートの入手法について知る
4) 情報収集	一般的な情報メディアや帰国者にとって便利な情報

情報メディアについて知り、自分に必要な情報を収集してみる	メディアについて知る 自分の進路や生活に必要な情報を情報メディアを通して収集してみる
5) 日語自学 日本語の自学自習能力を身に付ける	生活の中で日本語を学ぶ方法を知る 日本語学習に必要な基本的技能を身に付ける 自分で学習課題を設定する力を身に付ける
6) 生活技能 将来の生活の前提となる基礎的な算数の力を養い、また、簡単な機器の操作に親しむ	図表の読み取りができる 買い物や給料計算に必要な基礎的計算力を身に付ける 日常生活に必要な基本的数量単位に関する知識を身に付け、換算ができる 簡単な機器の操作をしてみる

中目標3：身近な生活や将来の生活の基礎となるコミュニケーションの力を身につける

小目標	達成目標
1) 話題コミ 日本人と接することを通して、コミュニケーションに対する柔軟な姿勢を築くとともに身近な話題でコミュニケーションできる	様々な手段を用いてコミュニケーションできることを意識する
	自分に身近な話題でコミュニケーションできる
	コミュニケーションストラテジーの有効性を知り、必要なときに使用できる
	コミュニケーションを積極的に継続させることができる
2) 日語知識 日本語の基礎的な知識を身に付ける	時や場所、相手との関係を考えて、話題を選んだり、適切な言い方を選ぶことの必要性を知る
	平仮名、片仮名及び日常よく使われる漢字が読み書きでき、また、ローマ字のしくみを知る
	基本的な語彙や表現の意味と使い方を知る
	日本語の文法についての基本的な知識を身に付ける
	テーマを持った短い文章が読み取れる 簡単な日記や自己紹介文が書ける